

京中生に インタビュー 2014

第1回

今の中学生たちは、どんな本を読んでいるのだろう？ さあ、今年度の「京中生にインタビュー」、開始です。 <編集部>

笹浪 竜くん (1年) 「考える野球」 小上優輝くん (3年) 「クロス・ファイヤー」



——「考える野球」。著者の遠藤友彦さんは、十年前の駒沢苦小牧の甲子園優勝に深くかかわった人だったんですね。

笹浪 野球をやっていると、「体だけじゃなくて頭も使い！」とよく言われます。小学生の時は、その「頭を使う」という意味がよくわからなくて、お兄ちゃんと話している時にこの本を薦められました。

——今年は、湧学館ができてちょうど十周年なんです。だから、十年前の出来事がよく比較で出てくるのだけど、駒苦優勝のニュースは、その中でも必ずベスト3に入ってくる大ニュースです。

小上 家には当時のビデオがまだいっぱい残っています。

——駒苦以前の北海道で、北海道の野球チームが甲子園で優勝できるなんて考える人はほとんどいなかったと思います。一、二回戦敗退でも「大健闘！」なんて世界でしたからね。駒苦の野球を見た時は、大ショックでした。北海道のどこからこういうチームが生まれてきたんだろうって。

笹浪 その秘密が、この「考える野球」だったんですね。

——まさに、発想の転換。「当たり前のことを素晴らしくやる」、「先のプレーを予測し自分のプレーを想像する」、そういう一つ一つの言葉が光ってますね。体力勝負の練習だけじゃなくて、想像力(頭)の訓練を続ける中で「甲子園優勝」とか「田中将大」といった現実が本当に生まれてきたんだ。

小上 「クロス・ファイヤー」を読むと、夢や目標を持って練習することの大切さを本当に感じます。それと、もうひとつ。主人公が努力するバネになっているのがライバルの存在だと思います。

——日本プロ野球・東京レオパースに女性投手・楠田栞が入団…という設定はとっても荒唐無稽なのに、なにか、コーチの言葉に遠藤友彦さんみたいな変な説得力があって、おもしろい小説だった。

小上 全部が全部「つくり話」というわけでもないんです。現に、京極町だって、女子の野球選手はもういるんです。

——へえ、そうなんだ。それは知りませんでした。ちょっと、びっくり。

笹浪 練習も試合も男子選手といっしょに出ています。他の町にも女子選手はいますし、ファイターズ・ジュニアにも女子選手は多いです。

小上 男子だから、女子だから…ということではなく、それぞれ自分が持っている特徴やセンスを活かしてみんなで野球ができる日が来るといいなあと思います。

——京極町の試合、見てみたいですね。おもしろそう。





菊地笙希くん (2年)・松本郁美さん (3年) 「永遠の0」

——前回、小上君の「クロス・ファイヤー」の回で、京極町に女子の野球選手がいることがわかって、インタビュー、すごく盛り上がったんですよ。今日は、その松本郁美さんの回だったので、とても楽しみでした。

松本 野球やってる時は、あまり、女子とか、男子とか考えませんね。野球やってることが楽しいだけです。

菊地 剣道でも練習はもちろん男女一緒にしますし、試合でも男女混合の形式もあるんですよ。

——へえ、すごい時代になったんですね。意外と早く「クロス・ファイヤー」の世界が現実になったりするのかな。

さて、「永遠の0」に入りましょうか。去年度の読書感想文コンクール入賞者14人の内、なんと2人が「永遠の0」で受賞。こういうケースは珍しいので、そのお2人にインタビューです。

松本 本も映画もアニメも全部見ました。

菊地 今の若者が、70年も昔に神風特攻隊で死んだ祖父のことを調べて行く。その設定が、多くの今の人たちに「戦争」というものを考えさせるきっかけになったと思います。

——しかも、「おまえの祖父は、海軍一の臆病者だ！」という始まり方ですからね。

松本 関係者に祖父・宮部久蔵のことを聞いて行く内に、どんどん「海軍一の臆病者」のイメージが消えて、そうではない真実の宮部久蔵の姿が現れてくる。宮部久蔵が死んだ真相がわかってくるにつれて、「戦争」の真の恐ろしさが現れてくる。題名の「0(ゼロ)」という言葉がとても印象的です。

——現在と過去が交錯する、相当高度な造りの小説です。これを映画でやるのは大変だったろうなと思いました。

松本 映画はだいたい小説と同じ構成でやっていました。だから、難解な場面もあって、小説を読んで「ああ、そうだったんだ」とわかったこともあります。アメリカ海軍が、敵なのに、宮部久蔵の勇気と技術をたたえて海軍葬を執り行う場面は映画ならではの迫力でした。

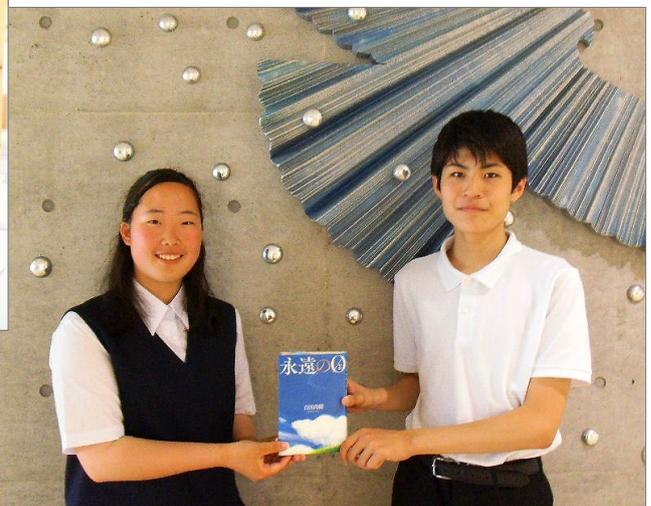
菊地 聞き取り調査の三人目で登場する元海軍飛行兵曹長・井崎源次郎が印象に残ってます。末期がんのベッドで「なぜ、今日まで生きてきたのか、今、わかりました。この話をあなたたちに語るために生かされてきたのです」という姿に感動しました。

——ここから、姉の調査の姿勢がぐっと変わって来ますよね。「戦争」の真実が知りたいと真剣になってくる。いい場面です。



左：小上優輝くん 「クロス・ファイヤー」
柴田よしき／著（徳間書店，2012）
右：笹浪竜くん 「考える野球」
遠藤友彦／著（エイチエス，2007）

左：松本郁美さん 右：菊地笙希くん
「永遠の0」
百田尚樹／著（太田出版，2012）



憧れの京都へ『平家』の史蹟を巡る旅を終えて②-

『平家物語』を読む会 村山功一

■最終日（5月16日）

快晴。気温上昇。

9時出発。昨日精力的に見学をしたため、今日は残すところ二箇所となりました。

■京都霊山護国神社～法観寺

まず向かったのが「京都霊山護国神社」。しかし私たちの目的はこの神社ではなく、神社の参道脇にあるといわれる“木曾義仲の首塚”です。

頼朝の命令を受けた範頼、義経の軍勢に追われ、終に琵琶湖に近い栗津の松原で討ち取られた義仲は、首を取られ都へ持ち帰られ、さらしものにされます。その後打ち捨てられました。その場所が現在の霊山護国神社の参道あたりと伝えられています。

奥田さんと手分けをして参道を上から下まで歩き、神社の社務所の方やこのあたりに住む人達に聞き回りましたが、発見できません。

ところが、たまたま角のたばこ屋から出てきたおばあさんに念のため聞いてみると「義仲はんの首は、あの参道の鳥居から少し下がったところに捨てられてはりました。それを法観寺さんが引き取って葬りましたんや…」と、優雅な京言葉で聞かせてくれたのです。「法観寺」は目の前にそびえ立つ“八坂の塔”のあるお寺です。おばあさん



の話では“首塚”も境内にあるという。もちろん一同大喜びで正門に向かいます。ところが……ぬか喜びもここまで。閉館日でした。“首塚”を見ることはできなくても、おばあさんの貴重な話も聞けたし、境内にあることも確認できました。ほぼ目的達成です。さらに、聖徳太子創建という由緒ある「法観寺」の正門で、八坂の塔をバックに記念写真を撮れたことは、思わぬ収穫でした。

初日～2日目の様子は
京極読書新聞 第57号 に掲載しています

■若一神社～清盛手植えの大楠木～西八条邸跡

いよいよ今回の旅の最後「若一神社」「清盛手植えの大楠木」「西八条邸跡」に向かいます。

京都駅北側の西寄り一帯は、かつて壮麗な西八条邸が構えられていました。その一角に建つのが「若一神社」。その境内から道路に大きくはみ出してそびえ立つのが、清盛の手植えといわれる楠木(ご神木)です。古くからこの木を伐ったり、移動したりすると“祟り”があると伝えられ、道路拡張のときさえこの木を避けて工事をしたそうです。境内には清盛の衣冠束帯(貴族の正装)姿の石像もあります。目を引いたのは“よもぎ祭り”のポスター。清盛は西八条邸の庭いっばいによもぎを植えたといひます。それにちなんだお祭りと思いますが、何とも優雅なことです。



宮司さんにお話をうかがうこと約1時間。大河ドラマ「平清盛」当時は、観光バスがひっきりなしに着き、大勢の人で境内が溢れたこと。宮司さん自身も、テレビ出演や講演などの依頼が相次ぎ多忙をきわめたこと。「ブームが去った今はこのとおりですよ」と笑う。来年開基850年を迎えるという、清盛を最も身近に感じる雰囲気の中で『平家』の話の聞いたことは、今回の旅の締めくくりにふさわしいひと時でした。さらに、この神社で新しい清盛にも出会いました。「朝霧の清盛公」と題された現代肖像画です。2012年この神社に奉納されたもので、衣冠束帯の正装ながら自ら植えた楠木の根元の縁石に、片胡座(かたあぐら)で座る姿は、リラックスしつつも武人としての風格を感じさせます。清盛を描いた肖像として最も新鮮で、魅力的なものでした。宮司さんの心温まる厚意と配慮に感謝しつつ、「若一八幡宮」を後にしました。

宮司さんにお話をうかがうこと約1時間。大河ドラマ「平清盛」当時は、観光バスがひっきりなしに着き、大勢の人で境内が溢れたこと。宮司さん自身も、テレビ出演や講演などの依頼が相次ぎ多忙をきわめたこと。「ブームが去った今はこのとおりですよ」と笑う。来年開基850年を迎えるという、清盛を最も身近に感じる雰囲気の中で『平家』の話の聞いたことは、今回の旅の締めくくりにふさわしいひと時でした。さらに、この神社で新しい清盛にも出会いました。「朝霧の清盛公」と題された現代肖像画です。2012年この神社に奉納されたもので、衣冠束帯の正装ながら自ら植えた楠木の根元の縁石に、片胡座(かたあぐら)で座る姿は、リラックスしつつも武人としての風格を感じさせます。清盛を描いた肖像として最も新鮮で、魅力的なものでした。宮司さんの心温まる厚意と配慮に感謝しつつ、「若一八幡宮」を後にしました。



■西本願寺～寺田屋～伏見稲荷大社

ここからは、ベテランドライバー奥田さんの“お勧めコース”を巡り伊丹空港に向かいます。

昼食に「西本願寺」の聞法会館で“精進定食”をいただき、伏見に移動。幕末動乱期、坂本竜馬が定宿としていた「寺田屋」を見学。今でも旅館として営業しているとのこと、驚きです。前の河原には竜馬とお龍の銅像もあり、幕末ムードいっぱいでした。

最後の見学は「伏見稲荷大社」です。青空に映える鮮やかな朱塗りの大鳥居と、その奥の社殿は壮観です。ここは全国の稲荷神社の総本社。沢山の参拝者、観光客、修学旅行生に混じって、私たちも裏手から“奥の院”への道に建つ“千本鳥居”をくぐりました。びっしりと立てられた鳥居の道は、まるで朱色の林を歩くようでした。何となく気持ちが高揚し、力が湧いてくるように感じられるのは、朱色が持つ効果か、あるいは稲荷大明神のご利益かも知れません。

ところで、この「稲荷大社」も『平家』と無縁ではありません。『平家』を素材とした歌舞伎「義経千本桜」の舞台となったのがこの神社です。兄頼朝に追われた義経は吉野山へ逃れようとしてここまでやってくると、別れを惜しむ静御前が追ってきて「連れて行って」とせがむ。追い返そうとする義経。そこに義経の腹臣、佐藤忠信が現れる。忠信は静御前を守りいずれ落ちついたら再会しようと約束するが、この忠信は狐が化けていたのである……というのが歌舞伎の内容で、この場面が伏見稲荷の社前で展開されます。奥田さんが案内してくれた観光スポットでしたが、はからずも『平家』に関連のあるところだったのは、嬉しい限りでした。

16時、伊丹空港到着。快晴、気温28℃。

19時15分、千歳空港到着。雨、気温6℃。



■おわりに

2日目に同行してくれた大谷先生(文学博士・82歳)は、黒滝さんを通して私たちの活動を知り、“黒滝レポート”のために様々なアドバイスをしてくれたり、一昨年には私たちの読書会にメッセージを寄せてくれた方です。同行の間「長恨歌(ちょうごんか=白楽天の漢詩)」と『平家』の関係など、熱く語ってくれました。現在、奈良で私たちと同じような漢詩の勉強会を開いているとのことで「私の会でも、このようなツアーを計画したい」と語っていました。今回先生と同行できたことは、私たちにとって望外の喜びでした。

計画段階から振り返ってみると、反省点も多々あります。しかし、結果として、

- (1) 見学予定地は殆ど回りきった。
- (2) 見学をとおして新たな発見があり、見聞を広げることができた。
- (3) 『平家』世界への認識が深まった。
- (4) 私たちの活動を広く知ってもらおう契機となった。

という点で、成果があったと評価しています。

そして何よりも、ハードなスケジュールにもかかわらず、参加者全員元気で帰着できたことが、一番の成果と思っています。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

